

わたなべうんせん

【渡辺雲僊】

(その四)

■「尾崎神社」の絵馬と「住吉社」の風景画

■昭和産業博覧会への出展

■掛け軸供覧

山崎達夫

■「尾崎神社」の絵馬

◎絵柄―『釣鐘弁慶』

三井寺と延暦寺の対立抗争があった時、比叡山の僧兵であった弁慶は、三井寺を焼き討ちにした際に鐘を奪い、比叡山まで引き摺って行った。鐘を打ち鳴らしたところ、「イノー（帰りたい）、イノー」と鳴ったので、谷底へ投げ捨てた。という故事から生まれたのがこの絵柄である。弁慶が釣鐘を背負ったこの絵柄は、昔から有名で人気がある。大津絵にも描かれ、お祭りの山車の大人形として作られたり、飾り人形として販売もされている。三井寺では今でも、その時の傷のついた鐘が、「弁慶の引摺り鐘」と称されて展示されている。

※「三井寺」というのは通称である。正式名は滋賀県大津市の天台寺門宗総本山「園城寺」である。



大正5年奉納時の絵馬



平成24年の絵馬

◎劣化への対応

神社の拝殿には絵馬が掲げられている場合が多い。一般的には板に描かれた絵の額であり、掲げられた当初は鮮明で立派である。しかし、時代の経過とともに外気や日光に晒され、劣化が進むことは避けられない。寺院の秘仏や博物館の作品

のような管理をすれば、劣化はある程度防げるが、衆目を集めることはできない。ましてや神社のような地域に密着した信仰の場で、信者や氏子が奉納した絵馬の場合、このような管理方法とはれないし、また、すべきではない。それではどの様にすれば、奉納された絵馬を後世に伝え残せるのか。作者自身が補修して描き直すのが最良であるが、作者自身が存命でなければ不可能である。絵馬の色が褪せ、額と共に朽ち果てるまでそのままにするか、あるいは、塗り直して補修し、後世に伝え残すかの何れかである。後者の場合、配色や色調などに細心の注意を払い、本来の美しさを復元することが求められる。時代の経過とともに劣化することが避けられない以上、塗り直して補修することは、やむを得ないであろう。しかし構図は制作当時のままが残っているので、そのことをもって良しとしたい。

■「住吉社」の風景画

「渡辺雲僊」について掲載させていただくなかで、楠会長から一枚の資料の提示をうけた。それは、『昭和旅行遊覧案内・矢野案内号』（昭和七年発行）という冊子であった。この冊子は毎月一回発行で、矢野町の特集号であった。そのな

かで史蹟名勝として、發喜城・茶臼山・尾崎神社・長慶寺・眞光寺・鷹宮・住吉・・・など多くの見所が紹介されていた。渡された資料は、そのなかの住吉の解説の部分であった。そこに添えられた図に、「住吉社（嘯月庵雲僊画）」と記載されていたのだ。絵が現存していれば大発見であるが、いまのところ所在は不明とのことであつた。

して近き邊にも並ぶものがなかつたのに今は社殿破壊したるを神靈安からず、故に美登利丸吾屋に入り來り是を告げ賜ふならんと古今の盛衰を思ひくらべ御社を再興したりと云ふ。

▼住吉

小崎。
海濱堤防松翠の裡に小祠ありて風景亦佳、諸船舶出入の目標となつてゐる。



（畫僊庵月嘯）社吉住

『矢野案内号』の記事

「住吉社」は昭和4年に拝殿が建立されているので、「渡辺雲僊」がこの絵を描いたのはそれ以前である。「渡辺雲僊」は尾崎神社の絵馬も描いているので、「住吉社」の絵馬も同様に描き、それが拝殿に飾られていたのかも知れないと、勝手に想像している。

現在の「住吉社」の拝殿の内側には、「住吉社」と住吉浜の松を描いた絵馬が、平成9年に奉納されている



現在の「住吉社」と
拝殿内の絵馬



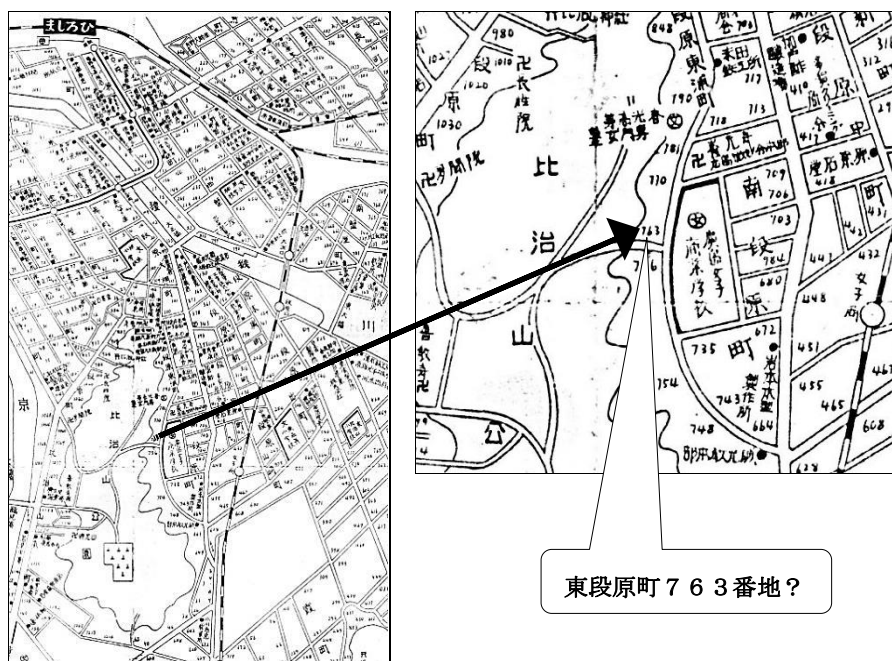
■昭和産業博覧会への出展

◎出品申請時の「渡辺雲儼」の住所について

大正13年に大分県中津市から矢野町に帰郷し、広島市東段原町に住まれたようだ。昭和産業博覧会出品申請時の住所は、『広島市東段原町七百六十三番地』と書かれていた。私の調べた範囲では、東段原町という町名は、昭和4年以降に発行された地図を見ても記載がなく、この町名の存在は一般的に知られていない。ただ、大正10年8月9日の大阪朝日新聞の記事のなかで、広島市皆実町の陸軍兵器支廠第五号火薬庫の爆発事故を記載した部分に、東段原町という町名が記載されていた。私の知る限り、町名として記載されているのはこの記事のみである。

住所地を確定しようとの思いで色々と調べるなかで、昭和14年発行で番地入りの広島市地図を調べた。この地図に東段原町という記載はなかったが、比治山の東側の段原地区に763と記された地点を見つけた。この段原地区周辺には他に763と記された場所はなく、この地点で間違いないと思われる。昭和初期には宇品線の駅として、段原の入口付近に、「東段原」という駅が存在していた時期もあったが、町名を表示したものではないと考えている。この地区の人口もまだ

多くなく、番地は確定していたが、町名は変化していたようであった。住所の地は、現在の比治山トンネル東側出入口付近のようである。



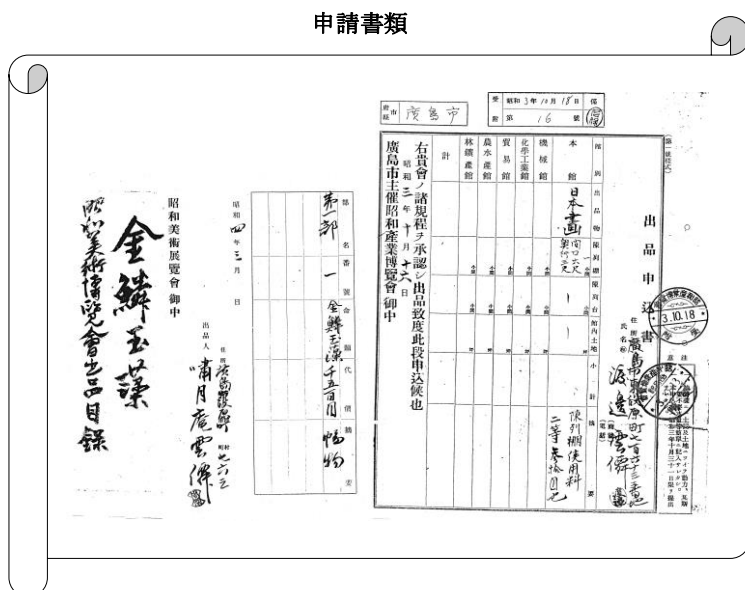
昭和美術展覧会へ出品申請

の各種産業の
紹介とともに、

子供遊園地な
ど色々な催し
が行われた。

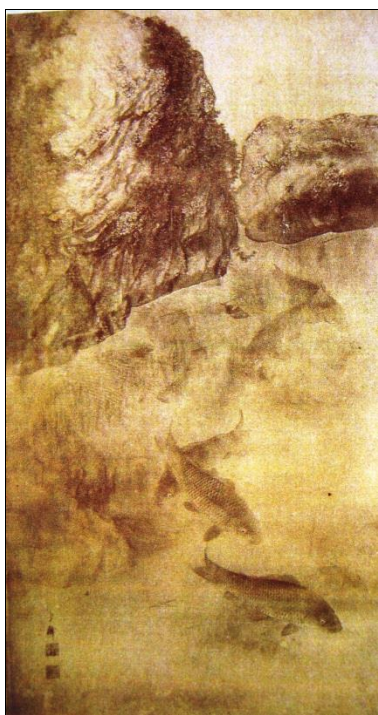
55日間の開催で約174万人が入場している。この

昭和産業博覧会の付帯事業のひとつとして昭和美術展覧会が開催され、そこに出品した。



広島県美術協会は昭和4年4月25日～5月15日に至る21日間、昭和美術展覧会を開催した。会場である「広島県立商品陳列所」とは、世界遺産である「原爆ドーム」のこたである。ここは当時から盛んに、美術展などにも使用されていた。

◎「渡辺雲僊」の展示作品



『金鱗玉藻』

※「渡辺雲僊」の展示作品『金鱗玉藻』は、昭和58年に広島県立美術館に寄贈された。

◎昭和美術展覧会出品物

・ 日本画―88点 (内特別出品25点)

・ 西洋画―176点 (内特別出品131点)

・ 工芸品―67点 ・ 彫刻―30点 (全部特別出品)

合計361点であり、特別出品には当時の諸大家の力作が網羅され、16021名の見学者があつた。日本画特別出品の画家には、上村松園、土田麥僊、小野竹喬、上村松篁、池田遥邨、金島桂華、ら25名がいた。「渡辺雲僊」の展示作品『金鱗玉藻』は、現在広島県立美術館に収蔵されている。いつの日か郷土出身画家の企画展が開催され、展示される機会にめぐまれば、ぜひとも観てみたい。

○本誌に掲載の場と多くの助言を頂いた楠精洲会長に感謝します

○参考資料 ・ 多くの資料提供を「渡辺雲僊」氏のご親族から受けた

・ 『昭和旅行遊覧案内・矢野案内号』(昭和7年発行)

・ 『大日本職業別明細図・大広島市』(昭和14年発行)

復刻版 (あき書房)

・ 『広島市主催昭和産業博覧会誌』

○筆者紹介 ・ 祖父、父ともに昭和三二年まで矢野町砂原で開業

・ 昭和二五年矢野町砂原で出生 菊水幼稚園第一回卒園

拝啓 時下ますますご清祥のこととおよろこび申しあげます。

このたび貴重な作品

渡辺雲僊作『金鱗玉藻』を

ご寄贈賜わり、ご厚意のほどありがたく厚くお礼申しあげます。

おかけをもちまして美術館のじゆう実をほり得ますことは関係者一同の深く喜びとするところであるばかりでなく、芸術を愛する県民全体の喜びでございます。

ご寄贈の作品は細心の注意と最善の方法をもってたいせつに保存し、有意義に活用させていただきます。ご厚意にお報いいたしたいと存じます。

ここに略儀ながら書中をもってお礼申しあげます。

敬具

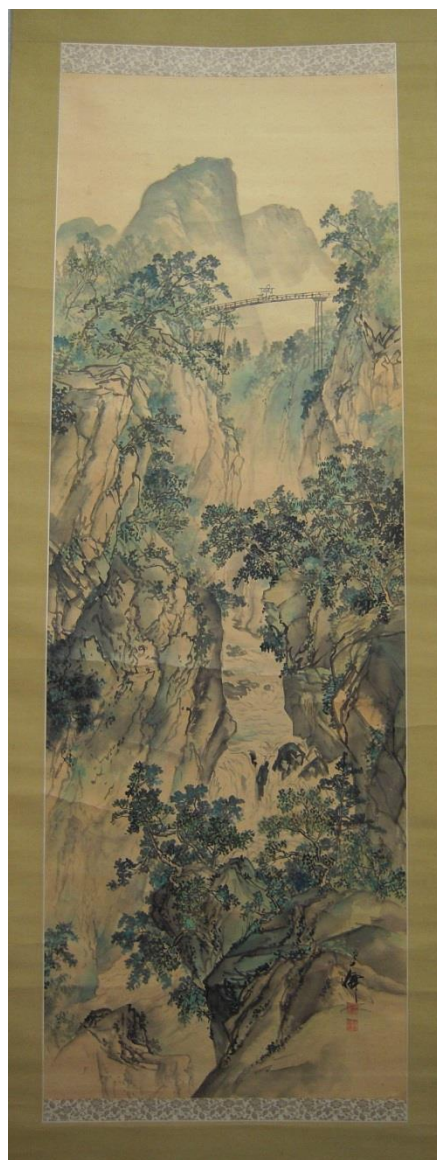
昭和五十八年七月一日

広島県立美術館長

渡辺 肇 殿



《七福岩の雪影》
耶馬溪第 16 番七仙岩の景



《念佛橋》
耶馬溪第 48 番念仏橋の景



《神 農》

医薬と農業を司る伝説上の神。
体は人で頭は牛、体を木の葉でおおう。史記では三皇の一人とされ炎帝とも称される。
農業を教え、百草を舐めて医薬を作った。



《孔 雀》